

松本直治宛井伏鱒二書簡

上田 正行

松本直治は一九二二(大1)年に富山県福光町に生まれ、一九九五(平7)年二月、八十三歳で亡くなったジャーナリストである。長く北日本新聞社に勤め編集局長、論説委員長を経て取締役、相談役にも就いた。井伏鱒二とは大本営派遣の陸軍報道班員として行を共にし、マレー戦線に参加しシンガポールでは同じ宿舎であつた。その時の模様は松本の著『大本営派遣の記者たち』(一九九三 桂書房)に詳しい。戦後も交流はあつたと思われるが、現在、目にする事の出来る松本直治宛井伏書簡は昭和52年を上限とし、昭和63年を下限とする。平成以後の書簡も少しあるが、これは節代夫人が認めたものである。代筆として書かれたものや松本への礼状もあり、二人の交友が夫人も交えてなされていたことが知られる。書簡、ハガキ合わせて全63通であり、この内、井伏本人の書簡が18通、節代夫人が5通、ハガキが井伏32通、夫人が8通である。参考の為に夫人のものも翻刻したが、識別のため番号を網掛けにした。

尚、書簡は松本の姪に当たる矢来千代子さんの所蔵

になることを申し添えておく。同氏には北日本新聞社時代の「悠閑春秋」(一九六九・一二・二八〜一九八二・三・二二)を網羅した『松本直治と茂子の愛と軌跡』(二〇〇七・五 ヨシダ印刷株式会社)がある。
なお、誤字、誤記と思われるものは「ママ」とした。

昭和52年

6月1日 井伏鱒二内(消印の日付) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

富山市駒見三四九 松本直治

先日は失礼申上げました。

このたびは又結構なお菓子をお送り頂きまして有難うございました。

時候不順の折柄、御体をどうぞお大事にお過ごし下さいませ。

早々 かしこ

2 8月8日 井伏鱒二 はがき

信州富士見町高森八〇四五 井伏鱒二

(松本の住所は最後まで変わらないので省略)

拝復

おはがき拝見しました。また、御地の佃煮を御恵送にあづかり有難くお礼申し上げます。

暑さ御用心のほど。

八月八日

早々

3 12月20日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

御壮健で大慶です。御恵送の「富山の味」有難く頂きました。お禮申し上げます。海音寺さんは西郷隆盛を完成できなかったのが心残りだったでせう。遺言によつて僧侶の来ない告別式でした。神保さん出席しました。中島君が弔文を読みました。堺君も出席しました。中寒さ御用心のほど。どうか良いお正月を。

十二月二十日

早々

昭和53年

4 1月8日 井伏鱒二(消印の日付) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

謹賀新年

昭和五十三年元旦

5 6月12日 井伏鱒二(消印の日付) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

御子息^{マコ}三年忌の由、悲しみ新たに思ひます。仰せのお習字はそのうち書いて郵送します。「海」にシンガポール時代のことを連載中ですが、大兄の見聞を何か新聞雑誌にお出しになつてゐたらゼロックスを拝読したいのです。長屋氏からは三月末に話を伺ひました。四月末に長屋君が亡くなりましたので、まるで夢のやうでした。神保さんにはそのうち会ひたいと思つてゐます。御清穆を祈ります。

六月吉日

早々

6 6月17日 井伏鱒二(消印の日付)

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

書物十冊到着しました。さつそく拝見してゐます。ずいぶん参考になると思ひます。済みましたら返送しますから自分のうち拝借させて下さい。

○新生マライの表情

○マレー電撃戦

○マライの土

○マレー新風土記

○占領地マレーを語る

○建設戦記

○南を見てくれ

○南方演芸記

お習字はそのうちお送りします。少し練習してから書きます。

梅雨に入ってから照りだしました。

梅清穆を祈ります。

六月吉日

松本様

再拜
井伏鱒二

○マライ戦話集

○従軍随想

今回は結構なものの御恵與にあづかりました。御禮申上げます。

例のルポルターージュの話は問ひあはせてあるところです。いづれ御様子します。

早々
井伏鱒二

7 6月26日 井伏鱒二

東京都杉並区清水一―一七―一

御手紙並びに同封の長谷寺の葉書拝見しました。

仰せの「新生マライの表情」は僕の仕事が始まり次第、他の書物と一緒にお返しします。それから「病める原発への証書」についてのことは、何かいい考へはないかと思つてゐます。ともかく編輯者に聞いてみて御様子します。

来月になつたらお習字をする時間が出来ますから悪筆をお送りします。

暑くなつたり梅雨空になつたりで老人は戸惑ひます。

ご清適を祈ります。

六月二十六日

松本直治様

早々
井伏鱒二

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

原稿落掌しました。(十四日朝) 両三日中に雑誌社の人に渡して意見を聞きその結果を御報告します。中間報告までに申上げますが暑さ御用心のほど。

十四日午後

早々
井伏鱒二

9 7月14日 井伏鱒二

拝復

原稿落掌しました。(十四日朝) 両三日中に雑誌社の人に渡して意見を聞きその結果を御報告します。中間報告までに申上げますが暑さ御用心のほど。

十四日午後

早々

10 9月6日 井伏鱒二

信州諏訪郡富士見町高森八〇四五

拝復

御手紙と「陣中新聞」落掌しました。北川君の詩は何も山下將軍が怒るほどのことにはないと思ひます。現地人の食糧問題で將軍の氣が立つてゐたときのことです。土人の女が草を食ふのは当り前だ。敗戦国だから」と河野さんに將軍が云つたさうでした。大兄の例の厚

8 7月6日 井伏鱒二(消印の日付)

い原稿は中央公論の「海」の塙君に渡して頼んで置きました。「海」でなくて「中央公論」の方に頼んでゐるわけです。

近日中に塙君に会ふ筈ですから事情を報告したいと思ひます。

「陣中新聞」は筆記がすんだら別便でお返しします。

どうも有難う存じました。

残暑の御御用心のほど。

九月六日

早々
井伏鱒二

松本直治様

11 9月8日 井伏鱒二

信州諏訪郡富士見町高森八〇四五

拝啓

今日、中央公論社の「海」の塙君から電話がありましたが、例の大兄の原稿を潮出版社の「潮」の記者に廻したらどうかとのことでしたから、では「潮」の編輯者に見せて貰ひたいと答へて置きました。と云ひますのは、「潮」といふ総合雑誌が今度大々に放射能の害についていろいろの人に書かせることになつたので、ちやうどいいチャンスだといふので右のやうに取扱つたわけでした。それで中央公論の方では「潮」に任したつもりになつたやうでした。

右、中間報告までに申し上げます。どうも思ふやうに、果取らなくて恐縮です。

今月二十五、六日に東京に帰ると思ひますが、それまでにお習字と拝借してゐる本をお送りします。後略のまま失礼します。

九月八日

早々不二
井伏鱒二

松本直治様

12 9月12日 井伏鱒二 はがき

信州富士見町高森八〇四五

拝復

藤田つぐじ等の写真落掌しました。どこで寫つたか私は忘却してゐました。真奈木少将と時計のことで良い話を聞きました。どこかで挿入したい話です。大兄のドキュメンタリーは今「潮」へ行つてゐる筈です。近日中に、はつきりした答をお傳へしたいと思ひます。残暑御用心のほど。

九月十二日

早々不二

13 9月14日 井伏鱒二

信州諏訪郡富士見町高森八〇四五

拝復

昨日、電報拝見し今朝、御手紙拝見しました。「潮」の話大慶です。実は他の用事で昨日、塙君が電話をかけて来ましたが、大兄の例の話が出て、あのなかの物語風（小説風）に書いてある部分は削除された方がいいのではないかと僕の云ふ説に塙君も賛成し、純記録風に書

いてあるところに一番感銘を覚えると云つてみました。たぶん他の読者もさうだらうと思ひます。

当地、今年は稲が大豊作です。今、真黄色になつてゐますが、数日のうちに収穫が始まつて黒土の田となることとせう。そのころ僕はここを引揚げます。

御清穆を祈ります。

早々

井伏鱒二

松本直治様

14 9月21日 井伏鱒二 はがき

信州富士見町高森八〇四五

拝啓

「潮」用の原稿六枚書きました。もう夜ですから明日、速達で潮出版宛に送ります。下書きがあるので写して書きました。小生、二十五日に東京へ帰ります。

お習字は東京に帰つてからにします。花火を揚げる祝日や祭日があるので落着きません。

御清適を祈ります。

早々

九月二十一日夜

15 9月25日 井伏鱒二

封筒見当たらず(信州からと思われる)

前略

九月二十二日に御手紙投函しましたところ宛名を富山市駒場三四九としてゐたので富山郵便局から返送し

て来ました。今、これから汽車で東京に帰らうとして鞆のなかを調べてゐるところでした。駒見と駒場の違ひでこんなことになります。それで返送されて来た手紙の内容をここに写します。

○先便の通り昨日(二十一日朝)速達文で前書き原稿を「潮」へ送つたこと。

○その原稿は大兄の見本原稿を殆どそのまま写したこと。放射能の詳しい話は略したこと。

○今度のことでは何ひとつ私はしなかつたこと。萬事は「海」の塙君がしてくれたこと。幸い塙君と親しい近藤君が「潮」の今度の編輯を手傳つてゐたので、大兄の原稿は塙君が近藤君に見せてくれ、「潮」としては大兄の原稿を偶然入手できて大喜びしたらしいと思はれること。

○御心配にあづかつた拙宅の病人はもうすつかり良くなつてゐること。血圧の下る薬を毎朝二錠づつ呑んでゐるだけのこと。以上―右のやうなわけです。

残暑御用心のほど。これから汽車に乗るので乱筆失礼します。

九月二十五日

井伏鱒二

松本直治様

○お習字は東京へ帰つてからお送りします。

16 10月5日 井伏鱒二

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

新聞切抜を御恵送にあづかりました。御手数をかけて恐縮です。「潮」の貴稿、うまく纏めてあると思ひました。反響が行き渡ればよいのですが。改めて御子息の冥福を祈ります。それにしてもお習字を早く送らなければいけないと思ひます。いま書きかけてゐる「海」の原稿に一と区切りついたらすぐ書きます。字が拙いので明日明日と思つて日が経ちます。今月十一日には京都へ行き十五日に帰ります。京都見物ではなくて武田薬品の薬草園を見に行くのです。歩く腰が痛むのでトネリコの杖をついて薬草を見て歩くわけです。絵の展覧会は横に歩かなくてはいけないので苦痛ですが、薬草見学なら前向きに歩くので少し楽だと思ひます。御清適を祈ります。

十月五日

早々

井伏鱒二

松本直治様

17 10月16日 井伏鱒二

東京都杉並区清水一―一七―一

前文御免下さい。

今日、愛媛県八幡浜市の未知の人から手紙が来ましたので同封します。大兄の御住所を知らせてくれといふ文面ですが、もし宜しかったらサインして投函をお願い致します。

秋らしくなりました。御健筆を祈ります。

早々

十月十六日

井伏鱒二

松本直治様

18 11月5日 井伏鱒二

東京都杉並区清水一―一七―一

拝啓

先日は銅器と玉杯を御恵与にあづかり恐縮です。私は何をしたわけでもなかったのですが折角ですから有難く頂きます。失礼ながら手紙で御禮申し上げます。

拝借している資料(書物)は用済み次第お返しします。それより前に御習字をお送りします。

寒さが急ぎ足に来るやうです。どうか御自重のほど。

早々

十一月五日夜

松本直治様

12月15日 井伏鱒二内(消印の日付) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

お寒うございます。お変わりなくお越しの事と存じ上げます。先日はお見事な鮭をお送り頂きまして有難く頂戴いたしました。御厚礼申し上げます。只今仕事に追はれ御禮礼も延びまして失礼いたします。取あへず御挨拶までに申し上げます。御寒さに迎ひます。どうぞ御身体をお大事になさつて下さいませ。

かしこ

20 12月19日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

先日は美事な鮭を頂きました。老生、昨日まで原稿をかいてみましたので御挨拶延引失禮しました。このごろ視力と頭脳が老化して二十年前の十分の一の速度で原稿が進みます。速度といふやうなものではありません。明日、お習字を試みます。書けましたらすぐお送りします。

どうか良いお正月を。

早々不

十二月十九日

昭和54年

21 1月4日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

謹賀新年

昭和五十四年元旦

昭和タイムス社時代の写真を御恵送にあづかりました。裏面「當第八九九一部隊検閲濟」といふ判が写真よりもまだ印象深いです。去年拝借した書物は東京に帰ってからお返しします。今、あたまの下宿で静養中です。御自愛を祈ります。

一月四日

早々

22 1月24日 井伏鱒二(封筒がないため年は推定)

東京都杉並区清水一―一七―一

お寒いことです。

永らく御本を拝借してゐましたが昨日ちよつと帰つて来ましたので小包便でお返しします。「陸軍報道班員手記」(「マレー電撃戦」)「昭南日本学園」(「マレー演芸記」)の三冊は後日お返しします。大兄著「新生マライの表情」は確かにお返しします。

どうも有難うございました。

両三日中にきた伊豆へ出かけて三月上旬に帰ります。キクワンシカタルを治療するためです。

寒さ御用心のほど。

早々

一月二十四日

井伏鱒二

松本直治様

23 4月5日 井伏鱒二

あたま市桜木町パークマンション629

拝復

貴翰拝見しました。

四月に入つて寒い日がつづいてゐましたが、昨晚の嵐を経て急に和やかな日射になりました。ほつとしました。

「潮」の御作評判がよかつたやうで何よりです。益々御健筆の趣大慶です。仰せの序文は誰か適當の人をお

選びになつては如何でせうか。今、ちやうどアメリカでも問題になつてゐるところでもあるし、序文は専門家に任せられた方がいいのではありませんか。私は原水爆のことは何も知りません。出版社の人と宜しく御相談になつた方が良策と思ひます。新聞社の人か朝日ジャーナルの人にお頼みになつたらいかがです。

小生、両三日中のうちに東京に帰ります。御自愛を祈ります。

四月五日

松本直治様

早々不一
井伏鱒二

24 4月28日 井伏鱒二

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

貴翰拜見しましたが今は世間的にも問題になつてゐる事項ですから誰か原爆のことに精しい化学者に頼まれてはいいかがですか。出版社の人はさういふ方面の適当な人を知つてゐる筈です。この前、雑誌に発表のときは総合雑誌と読物雑誌を兼ねてゐるやうなものとして序文執筆といふことにしたのですが、今度は歴史とした専門的な書物ですから専門家に来てもらふべきと思ひます。

御再考あつて然るべきだと思ひます。

このごろ急に寒い日があつて面くらひます。何卒お大事に。

早々不一

四月二十八日夜

松本直治様

井伏鱒二

25 5月14日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝啓

御健勝のことと思ひます。今度また富山の名物を頂きました。私は風邪も引かず冬を越しました。風邪よけのオマジナヒに少しづつ原稿を書いてゐます。今月になつて毎日梅雨のやうな日が来るのは閉口です。御用心のほど。取敢ずお禮申し上げます。

五月十四日

早々

26 5月16日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

辻中佐の話、わざわざ相すみません。序文(?)の話は先便で申された通りして下さい。今どこどころ御都合のいいやうに直して下さい。今日これから多治見へ出かけようと思ひますが降るので躊躇してゐます。

時節不順の折から御用心のほど。過労はいけません。

早々

五月十六日

27 6月6日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

前略

潮出版社から序文(原稿)を送って来ましたので訂正して只今連絡しました。

ゲラは届けて来るとのことでした。
取敢ず中間御報告まで。

六月六日

草々

28 7月12日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復。無事御帰還慶祝です。スイカ、銅の花瓶、共に有難く頂きました。「原發死」はあの翌々日、出版元から届きました。

申し遅れましたが御身内の御不幸お気の毒です。塙君は次第に恢復するだらうと思ひます。去年は友人たち一人も病氣しませんでした、今年に弱る人が出るやうです。気候不順が悪いのではないかと思ひます。

御用心のほど。 早々不一 七月十二日夕

29 12月8日 井伏鱒二

東京都杉並区清水一―一七―一

拝啓

御無沙汰してゐますが、お変りないことと思ひます。先日は立派な新巻鮭を有難く頂きました。有難く御

礼申上げます。

この前拝借してゐた資料(書籍)は、今度「海」の原稿を(前編終)としましたので、来年正月に小包便が楽になつてから郵便でお送りします。近日中に神経痛療生のため転地して正月下旬ちよつと帰つたとき発送するつもりです。

今日、十二月八日です。昭和十六年の八日今日、南支那海を南航してゐたときのことを思ひ出します。香港沖百五十哩、髯の栗田中佐が甲板で東方遙拝させたのを思ひ出します。蒼茫として夢の如しですが、生涯忘れられないでせう。

御健康を祈ります。

十二月八日夜

松本直治様

井伏鱒二

早々

昭和55年

30 2月24日 井伏鱒二

熱海市桜木町パークマンション六二九

拝復

御壮健で何よりです。

切抜と潮出版のチラシを拝見しました。ドイツで独訳されるらしいとのこと結構です。原爆、原発のことは東ドイツ、西ドイツでは真剣に考へられてゐる筈です。この前拝借した資料(マレー時代の書物)は東京に帰

つてから郵便でお返しします。

今、僕は腰痛治療の目的で表記に妻とゐます。
当地、先日珍しく雪が降りました。今年は寒さがひど
いやうです。

御用心のほど。

早々不一

二月二十四日

松本直治様

31 7月10日 井伏鱒二

東京都杉並区清水町一―一七―一

よく降る雨ですが御機嫌宜しいことと思ひます。

先日はお菓子を頂きました。有難く御礼申し上げます。
このごろ僕は本を出しませんが先日本屋が著作を青
少年向きにして出してくれましたので一部御送りしま
す。

「海」に連載してゐた原稿はどうも軍人向きでなくて
雑音が入るので止すことにしました。せっかく材料を
頂きながら申訳ありません。

拝借してゐた材料は近日中にお送りします。

今日はこれで失礼します。

早々

七月十日夜

井伏鱒二

松本直治様

32 7月15日 井伏鱒二

東京都杉並区清水町一―一七―一

拝啓

御手紙拝見しました。潮社の随筆自選集の話は三浦
君から先々々日あたり聞きましたが、それより前、従来
から関係ある某社から同じやうな話があつて、もし出
すなら君の社で頼むと約束してゐましたから三浦君に
はそのやうに答へて置きました。これでもうその話は
終つたものと思つてゐましたが、同じプランのものを
二つの社から出すのは変なものですから、すべて御破
算にした方がいいと思ひます。ですから潮社からもし
問ひ合せか何かあつたら宜しく御裁量の上、断わるや
うにして頂きたいのです。

右、宜しく御願ひします。

先日、マレー軍宣傳班にゐた木村中尉から手紙が来
て、元参謀部の会があるから来月上京すると云つてあ
りました。何のことかわかりませんが、さう云つてあり
ました。私は今月中に信州へ行きます。今年は夏が短い
といふことですから早く帰る豫定にしてゐます。
御健康をお祈りします。ランピツ失礼します。

早々不一

七月十五日

井伏鱒二

松本直治

33 12月1日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水町一―一七―一

拝啓

年末御多忙と思ひます。今年もまた新巻を御恵送にあづかり有難く御禮申上げます。おかげさまで私も丈夫です。散歩のときは杖をつきますので雨の日には傘を左手、杖を右手にします。

御健康を祈ります。

十二月一日夜

早々

昭和56年

34 9月2日 井伏鱒二 はがき

信州富士見町高森

拝復

御病気の由、驚きました。元氣を出して下さい。

「原発死」から引用しても潮社は何も云はない筈です。

続篇歓迎します。

早々

九月二日

35 9月吉日 井伏鱒二(消印は10月8日) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

貴翰拝見しました。老生、十月一日に山から帰つて来ました。今年には排気瓦斯が少なくて少し助かります。

二ヶ月の御入院生活の由、御苦勞だつたらうと思ひ

ます。御快癒を祈ります。

早々

九月吉日

36 10月吉日 井伏鱒二(消印は10月19日) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

前略御免下さい。よほど前に拝借した書物何冊かのうち、お返しするのを怠つてゐた三冊を別便でお返しします。どうも御無礼しました。シンガポールのこと書きかけて中止して失態でした。戦争のことを書くこと雑音が入るので考へものです。御清適を祈ります。

早々不一

十月吉日

12月14日 井伏鱒二内(消印の日付) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

お寒うございます。

只今 結構なお菓子をお送り下さいまして有難うございました。御礼申し上げます。

きびしいお寒さになります。どうぞお体をお大切に

なさつて下さいませ。

取あへず御礼の御挨拶までに申し上げます。 草々

昭和58年

38 7月11日 井伏鱒二(昭和58年は推定である。内容からはNo.32に近いものかも知れない。消印が判読不

能) 東京都杉並区清水一―一七―一

お暑いことですがお変りないことと思ひます。先日

はマキブリを有難く頂きお禮申上げます。

今月早々の頃 シンガポールで宣傳班の中尉だった木村さんが訪ねて見えました。別に変った話はありませんでしたがお互いに年だけとはとつてゐるのがわかりました。

今年の暑さは相当なものやうです。御用心のほど。

七月十一日

早々不一
井伏鱒二

松本直治様

39 10月13日 井伏鱒二 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝復

御無沙汰しました。入院されてゐたらしい御様子ですがどうか御大事に。僕は腰痛のためなるべく外に出ないやうにしてゐます。歩くと息切れがして腰がだるくなるのですが、家で椅子に腰かけてゐるぶんには痛さはありません。戦争へ行けば腰抜けです。ランニングでは落伍者です。近いうちに医者のところに行くつもりです。何卒御用心のほど。

十月十三日夕

早々

ります

昨日はお見事な数の子お送り頂きました。有難く厚く御礼を申し上げます。本日さつそく漬け込みました御手術をなされました由にて御経過御良好と承りましておよろこび申しあげます。お早く診断がおつきになりましたのでせう。お幸せをなさいました。どうかお後をお大事になされましていつまでも御健康でいらして下さいませ

追々と御寒さきびしくなります。お風邪など召しませぬ様にくれぐれも御用心遊して下さいませ

失礼ながら取あへず御礼のみにて かしこ

十二月十七日

井伏鱒二内

松本直治様

昭和59年

41 7月吉日 井伏鱒二 はがき(消印は7月9日)
お暑うございます。吟味詰合せを御恵送にあづかり御禮申上げます。おかげさまで小生無事に暮してゐます。御健康を祈ります。ごきげんよう。

七月吉日

早々

12月17日 井伏鱒二内

東京都杉並区清水一―一七―一

本年も残り少くなりました。御無沙汰を申上げてお

12月7日 井伏鱒二内(消印の日付) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

いよく師走に入りまして御寒さ身に沁みてまいり

ました

御無沙汰申し上げておりますが お変りなくお過し
でいらつしやいますか 昨日はお見事な粕漬をお送り
下さいまして有難うございました 御厚礼申し上げます
井伏は先日末白内障の手術をいたしました結果は
良好でございますが まだいびつの字になりまして御
礼を申し上げられなくて失礼いたします どうぞよろ
しく申し上げます 御寒さどうか御身御大切になさつ
て下さいませ

お風邪など御用心なさつて下さいませ かしこ

43 師走吉日 井伏鱒二(消印12月15日) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝啓、おかげさまで手術はうまく行きました。また先
日は美味食品を有難く頂き御禮申し上げます。大兄は医
者から開放させられたと云ひながらも豫後が大事です。
子息さんの不慮の件もあり親たる者は一日も長く生き
なければなりません。

御自愛を祈ります。いい御正月を御迎へになります
やうに。 早々不一

師走吉日

昭和60年

44 1月1日 井伏鱒二(消印は4日) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

明けまして

おめでとうございます

昭和六十年一月一日

45 7月10日 井伏鱒二(消印) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

御無沙汰しましたがお変りないことと思ひます。私
は目を悪くしてゐたのですが、昨今当から良くなりま
した。先日は結構なものを御恵送にあづかり有難うご
ざいました。御禮申し上げます。先日、西荻窪で堺君に会
ひましたが元気でした。御盆で御子さんのことを思ひ
出されるでせう。御冥福を祈ります。

どうか御自愛のほど。有難うございました。

早々不一

46 12月8日 井伏鱒二(消印) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

拝啓。御丈夫なこと、拝察します。昨日は鮭を御恵送
にあづかり有難く頂戴しました。先日、カメラの石井幸
之助君に会いましたが丈夫さうでした。堺君も丈夫との
ことです。どうかお大事になさい。

昭和61年

47 1月1日 井伏鱒二（消印は1月3日）はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

明けて

おめでどうぞございます

お寒さの中くれぐれも御身御大切に

御健康を祈り上げます

一月一日

48 5月吉日 井伏鱒二（消印は5月4日）

東京都杉並区清水一―一七―一

御無沙汰しました。桜も散りましたがいかがお暮し
ですか。さて早速ながらお願ひですが、大兄の「原発死」
の書出し十一頁から十五頁までの文章を僕の文章の其
から取入れさせて頂きたいと思ふのですがいかがでせ
うか。

僕の文章の表題は「無常の風」といふ題で大兄の「原
発死」の最初に出てゐたのと同じ文章で僕の「自選全
集」第十一巻か十二巻に取入れるのです。僕としては急
に考へついたことですから不意に申出た次第です。即
ち大兄の文章を使つて僕の文章を飾らうとするのです。
すみませんが御許容を願ひたいのです。僕の随筆集
に入れるわけです。もし御承諾願へますならOKと御
返事を願ひたいのです。何卒よろしく願ひします。

五月吉日

松本直治様

49 5月9日（消印） 井伏鱒二 はがき

杉並区清水一―一七―一

前略 電報御手紙でいろいろお世話さまになりました。
た。

大兄の本にある諸論は新潮記者が詮をして雑誌へ出
すと云ひましたので、ではさうしてくれと中間報告し
て置きました。僕の自選集に入れるものは別に入れる
ことにしましたので僕の詮で一部を入れることにして
ゐます。来月あたり入れるつもりです。いろいろ御迷惑
をかけて恐縮です。中間報告までに申し上げます。御用心
のほど。 早々

50 6月19日（消印） 井伏鱒二 はがき

杉並区清水一―一七―一

新潮七月号のがうまく書けませんで失禮しました。
効果は無かつたらうと思ひますが御勘弁願ひます。
絵はがきで遠き山といふ山を見ました。どつしりとし
た山であると思ひます。どうか御健康に留意のほど、御
健康を祈ります。では左様なら。 匆々不一

51 7月4日（消印） 井伏鱒二 はがき

杉並区清水一―一七―一

貴翰拝見しました。きのふは酒の肴を頂き有難く御禮申し上げます。新潮記者が文章をつけ加へてくれ恰好つけてくれました。原爆のことはいろんな人が問題にしはじめてゐるやうです。老生、近日のうちに信州へ出かけます。

御健康を祈り上げます。

匆々不一

昭和62年

52 2月16日(消印) 井伏鱒二 はがき

杉並区清水一―一七―一

拝啓

さつそく電話を頂き恐縮です。今年もおかげで無事二月をすごすことが出来ました。御自愛を祈ります。

早々不一

53 7月9日(消印) 井伏鱒二 はがき

杉並区清水一―一七―一

拝復

毎日お元気で驚きます。こないだは巻鮒を頂き御禮申し上げます。堺君も神保君も御無事のことと思ひますがさて、どうなんだらうといつも考へるばかりです。年をとつて無精になりました。しかし、どうかお大事に。御用心のほど。

匆々不一

昭和63年

54 1月1日 井伏鱒二(消印不明) はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

謹賀新年

昭和六十三年元旦

7月8日(消印) 井伏鱒二内 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

お暑うございます。御無沙汰申上げております。奥様御不快の由如何でいらつしやいますか。只今はご陽気も悪うございます。どうぞ御大事になさいますように

本日はおめづらしい調法なお品お送り下さいまして有難うございました。御厚礼申し上げます

御身呉れくもお大切に御健康を祈り上げます

かしこ

56 12月6日 井伏鱒二 はがき

杉並区清水一―一七―一

拝復

貴翰拝見しました。このごろ僕も目が悪くなり起居に困りますが、大体のところは見当つけて何とかしてゐます。海音寺も亡くなりました。彼が死ぬ前に朝日新聞社の会があつて、そのとき僕はテーブルスピーチで、サイゴン河のことを話すつもりでしたが、真

面目な会だつたのでスピーチを略しました。屋屋(No.5の長屋のミスか)君が亡くなる前に僕に会ひに来てくれましたが、まさか亡くなるとは思ひませんでした。菱刈君は亡くなる前には元氣らしく働いてゐました。みんな亡くなつてしまつてサヨナラを云ふわけです。

早々不一

井伏鱒二

平成元年

7月8日 井伏鱒二内

東京都杉並区清水一―一七―一

いつまでもうつとしい梅雨空でございます

お変わりなくお過ごしでしょうか

今日は名物の粕漬をお送り下さいまして有難く頂戴いたしました いつもお心づくしたまはりまして厚く御礼申し上げます

これから日毎にお暑さも加わつてまいります どうか御身体をお大切になされまして お元氣でおられますよう心からお祈り申し上げます 末筆ながら御奥様におよろしく願ひ申し上げます

先は 取りあへず 御礼までに申し上げます かしこ

七月八日夜

井伏鱒二内

松本直治様

平成2年

12月(不明) 井伏鱒二内 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

今年もいよ／＼終りに近づきまして月日のお早いにはおどろきます お寒くなつてまいりましたが お障りもございませんか 本日は又結構な鮭の粕漬をお送りいただき有難うございました いつもお心遣ひたまはりまして恐縮いたしております 御厚礼申し上げます

お寒さきびしくなつてまいります どうぞ御身御大切に呉れ／＼もお風邪など御用心なさいませ 井伏は近頃字が書けなくなりまして困ります 米つぶのようになつてしまひます 御礼までに申し上げます 失礼いたします

平成3年

7月6日(消印) 井伏鱒二内 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

間もなく梅雨も明けますがこれからは暑い夏がまいります 御無沙汰申し上げておりますがお変わりもなくお過ごしでございますか このたびは結構な酒肴をお送り頂き有難うございました 御厚志を有難く御礼を申し上げます 井伏も体の方は無事でございますがぼん

やりとして暮しております お手紙も書けず申訳ない
ことでございます

お暑さの中 どうか呉れくも御体をお大事に
御健康をお祈り申し上げます かしこ

7月21日 井伏鱒二内

東京都杉並区清水一―一七―一

いよくお暑さ本番となりました

先にはお手紙を拝見 昔くをあれやこれやと思ひ
出し お手紙のあとには不思議に記憶がよみがえり
つかしくございました たいへん貴重なお手紙でござ
いますので 松本様はお書き残しなされたらと切に思
ひました 井伏はものゝ熟読もなし書けもできず困る
状態になりました 残念でございます 博浪沙のことや
小耳にしたおうわさなどあの時代を想ひ出しましては
話し合ひました 本当になつかしい良いお手紙を頂き
まして有難うございました 御礼申し上げます

これからお暑さきびしくなります どうか御身御大
事にお祈りいたします

七月二十一日

かしこ
井伏節代

松本直治様

御奥様

平成4年

7月7日 井伏鱒二内 はがき

東京都杉並区清水一―一七―一

暑中御見舞申し上げます

昨日は結構なお漬物をお送りいただき有難うござい
ました いつもお心づかひ下さいまして厚く御礼申し
上げます 不順の時候でございます どうぞ御体をお
大事に御健康をお祈り申し上げます アサヒグラフに
井伏が載りましたのでお送りいたします 堺様にもお
送りいたしました

七月七日

かしこ

平成5年

8月31日 井伏節代

東京都杉並区清水一―一七―一

前文御免下さいませ

このたび 故 鱒二永眠の際には 御鄭重なる御弔
慰を賜りまして有難く厚く御礼を申し上げます

葬送から二ヶ月余胃の手術をいたし退院して よう
やく快方に向ひました 先日埋葬を済ませ少し落着き
ました

長いこと御無音に内過ぎ申訳なく存じます

今年の夏も冷えもおめづらしく不順の気候でございます

ます

どうぞ 御身体お大事に ご用心遊して下さいませ

先は御礼までに 乱筆失礼いたします

八月三十一日

かしこ

松本直治様

井伏節代

*七月十日に井伏は九十五歳の生涯を終えた。

平成7年

7月24日 井伏節代

東京都杉並区清水一―一七―一

拝啓

いつまでも梅雨が明けませんでうつつとうしいこと
でございます

御二方様共にお障りなくお過ごしでいらつしやいま
すか

先日は御丁寧なお供えをお贈りたまはりました有難
うございました いつもお心づかひをいただきまして
恐縮いたしながら御無礼を重ねまして申訳なく存じお
ります

先日山梨で展覧会をいたしまして図録が出来ており
ますのでお送りさせていただきます つまらぬもので
ございますがお目にかけます

不順の折柄どうぞ御体をお大切になされて下さいま
せ

乱筆失礼申し上げます

七月二十四日

かしこ

井伏節代

松本直治様

御許

(注)四月二十九日から七月十六日にかけて、三回忌記念の企画展とし
て「井伏鱒二展」が山梨県立文学館で開催される(全集別巻二の年譜に
よる)

*十二月九日に松本は八十三歳の生涯を終えた。

枚数の関係で丁寧な解説できる余裕はないが、二人
の間で書簡の遣り取りが頻繁に交わされるようになる
のは、松本の息子勝信の死(昭49・11・14 31歳)を
切っ掛けとする。原子力発電所に勤務していて癌で死
亡した息子のために松本は鎮魂歌「さようなら パパ」
を書いた。原発告発の文でもあるこのルポルタージュ
を活字化しようとして松本が頼ったのが、かつての戦
友井伏であった。その結果、原稿は野間宏の責任編集で
「原子力発電の死角」という特集を組んだ「潮」(昭和
53年11月号)に掲載されることになった。井伏は「無常
の風」という序文を寄せている。背景にはかつての陸軍
報道班員としての友情と、既に井伏が『黒い雨』(一九
六六・一〇・二五 新潮社)を出版していたという事情
があるであろう。これを契機に松本は『原発死―一人息
子を奪われた父親の手記』(昭和54・7 潮出版社)『火

の墓標―原発よ一人息子をかえせ』(昭和56・12 現代書林)を刊行していく。

井伏は又、「海」に「徴用中のこと」(昭52・9〜55・

1)を連載しており、松本に資料の提供を申し出ている。しかし、連載は色々雑音が入ると言う理由で中止される。そのあたりにどういう事情が介在したのかも興味深いところである。言いたいことは多々あるが今回は翻刻を中心にして解説に深くは入らないこととした。

付け加えれば、矢来氏宅には書簡の外に井伏の色紙が三枚、原稿が二種(「無常の風」「松本直治君の書いた『原発死』)と井伏の写真二葉(『大本営派遣の記者たち』のもの)と、「マレー会」の仲間と料亭で会した時のもの)がある。又、昭和56年4月7日付けの松本宛野間宏ハガキが一通あり、自著の出版について野間の手も煩わせたことが知られる。

尚、活字化に当たっては節代夫人、長女太田比奈子氏のご快諾を得ることができた。記して謝意を表したい。併せて仲介の労を取られた東郷克美氏にも謝意を表したい。

(國學院大學教授)